

先日の日曜日、家内と連れだって官舎周辺を散策した。帯広駐屯地の台下の大山緑地も、既に雪は融け、湿原が姿を現していた。新たな発見がありそうで木造の歩道を歩いた。話には聞いてはいたけれども、明瞭にこれぞ典型的な谷地坊主と言うべきものが沢山あるのではない。その写真は次の通りである。



朔東の地は、北海道全体の湿原面積(日本の湿原面積の8割を占める6万ha)の6割を占め、日本最初のラムサール条約登録(1980年)第一号の釧路湿原をはじめ著名な湿原も多い。更には、自衛隊演習場にも湿原が点在している。朔東の著名な湿原は、釧路湿原のほかは、十勝川河口域一帯の十勝湿原、厚岸湿原、風連川・標津川一帯の根釧湿原、斜網地区の斜里湿原である。

これら朔東の湿原でお馴染みと言え、**「谷地坊主」**だ。谷地と言うのは、湿原を意味し、坊主と言うのは、もぐら叩きゲームの土竜(もぐら)のような或いはお椀を伏せたようなと形容すべきか逆トックリ型というか、その形が坊さんをイメージするから付けられたのであろう。写真を見て頂きたい。

この谷地坊主は、ヒラギシスゲ、カブスゲ等のスゲ類が繁茂した根が絡んで株になったものが、冬土壌凍結でシバレもち上げられ、やがて雪融け水により、周りの土が抉り取られて出来上がる。これが毎年行われることにより、写真のような典型的な谷地坊主になる。1年に1mmと言うほどの成長振りである。悠久とは言わないが、相当の時の流れを感じて貰いたいものである。

この谷地坊主も春は黒百合、秋には蝦夷リンドウなど坊主頭に草が生え、花が咲く。草が茫々と生えている様は、さもイガグリ坊主の頭を想像させ、湿原の剽軽者(ひょうきんもの)と形容出来よう。

谷地坊主自体は、根株が絡み合っただけのものであるので堅いものだ。従って、人がその上に乗ることは出来るが、逆トックリ型であるので、極めて不安定で、グラグラしているので、泥炭地の中に滑り落ちること必定でしょう。底なし沼ではないけれども、……谷地坊主が自生している湿原は、このように人間が行動することもママならず、自衛隊の戦車や車も基本的には避ける所謂死地である。機甲科隊員は絶対に行かないと言っていま

したが・・・

この様な、湿原も近年流域の開発により、乾燥化が進みつつあると言われている。釧路湿原の場合、ある調査によると近年の 50 年でおおよそ 20%の面積が減少したと言う。大正時代からだとも 2/3 に減少したとも。簡素化の主たる原因は、湿原への土砂流入の増大である。湿原は、水と植物と水鳥や昆虫の共存している自然の宝庫である。この絶妙なバランスは一旦崩れると復元することは困難だ。この様な観点で、水鳥の生息地として国際的に重要な湿地とそこに生息する動植物の保護のために各国がその領域内の湿地を指定し保全することなどを定めたラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）は画期的だ。釧路湿原は国立公園にも指定(1987年)されており、保全のための行動と啓蒙運動がなされている。釧路湿原には、植物約600種、ほ乳類26種、両生・は虫類9種、鳥類約170種、昆虫類約1150種、魚類34種が確認されている。湿原をゆったりとカヌーに身を任せ、湿原と谷地坊主の生成過程に思いを馳せ、大空を舞うオオハクチョウ、アオサギ、丹頂鶴やオジロワシを仰ぎ見、湖沼のフナ、鯉を観測し、名も知らぬトンボを見つけて見てはどうだろうか。身も心も洗われること請け合いだ。

釧路湿原展望台は、谷地坊主をモチーフにして建設され、360度湿原を見渡すことが出来る。参考までに、日本の登録地は 11 個であるが、そのうち朔東からは、釧路湿原のほかは、霧多布湿原、厚岸湖・別寒辺牛湿原がラムサール条約に登録されている。